

道徳の時間の指導の改善を目指して

1 はじめに

多様な価値感が横行する変化の激しい現代社会では、自己中心的で他を思いやれなかったり、物質的には恵まれていても心の豊かさがともなわなかったりなど、社会全体のモラルが低下しているといわれている。また、少子化、核家族化が進み、人と人とのつながりや地域・社会とのかかわりが希薄しているともいわれている。以前は周囲の大人から学べた善悪の判断や思いやり、地域社会で学べた協力や感謝の気持ちなどに、生徒が接する機会は減ってきている。人間としての生き方をはじめ、様々なことに関心を持ち、心身ともに著しく発達しようとする中学生の時期に、これらの影響は大きい。

このような時代背景から、学習指導要領解説道徳編（平成 20 年 9 月 以下解説と示す）では「これからの学校における道徳教育は、こうした課題を視野に入れ、生徒が夢や希望をもって未来を拓き、一人一人の中に人間としてよりよく生きようとする力が育成されるよう、一層の充実が図られなければならない。」としている。したがって、学校全体で行われる道徳教育の要として、補充、深化、統合する役割を担っている道徳の時間の指導の工夫や改善は、教師が早急に取り組まなければならない課題の一つであると考ええる。

2 授業実践

(1) 生徒が身近に感じる教材の開発

解説では、「(3) 先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。」とある。副読本にある読み物資料を活用するだけでなく、生徒の実態に合った身近な資料や、生徒が興味関心や学ぶ意欲がもてる教材の開発は必要である。

ア 自作資料

【資料①】の「ミサちゃん、ごめん。」は、自作資料である。本校では、地域のお祭りの手伝いや高齢者施設の慰問など、生徒によるボランティア活動が盛んである。毎年、ボランティア活動を希望する生徒は多く、自分たちも楽しめる夏祭りの手伝いなどは生き生きと活動している。しかし、地域清掃などは希望者が少なかったり、希望はしたものの活動できなかったりする生徒もいる。また、活動後の報酬を期待するなど、純粋な気持ちで活動に参加していない生徒も多い実態から、この資料を作成した。お年寄りに文句を言われても黙々と活動する「ミサちゃん」と、ボランティアをすればほめられたり喜ばれたりすることが当然だと考える「まみ」の二人を、手紙という形からとらえさせた。互いの立場に立って考えさせることで、自分とは違う価値に気づき、自己の内面に向き合えろと考えたからである。

【資料②】の「私のもやもや」も同様で、新学期によく見られる生徒の姿を手紙の形で考えさせた。内容が身近だったことと、資料が短いために話合いに時間をかけることができた資料である。

イ 著名人が主人公の資料

ビートたけし著の「菊次郎とさき」（新潮社）を資料として活用した実践もある。多方面で活躍している著者は誰もが知っている有名人であり、生徒は興味・関心をもって授業にのぞむことができた。資料に入りやすくするために、導入で保護者とかかわりで嫌だと感じたことを質問したのだが、生徒にとってはマイナスの体験想起だったため、意見が少なかった。しかし、著者の紹介では目を輝かせた。特に、お笑いスターである著者が母親の死後に語った、母を思う言葉の朗読で、生徒は真剣な表情で耳を傾けていた。

(2) 同一資料による指導方法の改善

道徳の時間の指導効果を高め、ねらいを達成するための工夫として、資料提示の工夫、発問構成の工夫、体験活動等を生かす工夫など、様々な方法が考えられる。しかし、指導案を作成するときには、一つの資料に対して一つの授業実践のみだったので、十分に検討した授業でも、実践後に反省することが多かった。そこで、同一資料で3種類の指導案を立て、どの指導法が効果があるのか複数のクラスで実践してみることにした。また、同学年だけでなく、茨城県立佐和高校の協力を得て、中2～高1で実践し、校種や学年の違いによる生徒の反応を見ることで、より効果的な指導ができるのではないかと考えた。

ア 指導方法

【資料③】は、その指導案と事前アンケート、資料である。三つの指導案A～Cは一度立案した後、実践、検討し、さらに改善したものである。

【検討後】

A・・・主人公の気持ちと今後の行動を問う中心発問。
B・・・G Tの体験談を終末に聞く。
C・・・前半はAと同じ展開中心発問でキャラクターカードを使って意見を出しやすく工夫。

【検討前】

A・・・母の言葉を聞いた主人公が、ボランティア活動が続けるかどうかを糸口として、自分だったらどうするか、またボランティアとは何か考えさせる。意思表示カードで自分の考えを示したり、班で話し合う場面がある。
B・・・写真やG Tの話から資料に入り、前半はAと同じく展開する。後半はG Tへのインタビューからボランティアについて考えを深める。
C・・・資料とV T Rをきっかけにしてボランティアについて考える。わかっていても行動できない人間の弱さと奉仕の素晴らしさの両面を追う。前半は資料とV T Rで進め、後半は一般化を図る。

展開Aは、はじめ主人公の気持ちをていねいに追うという流れであったが、実施してみると、発問が安易すぎて中心発問への気持ちが深まらないことが分かった。そこで、前半部分の主人公の感情を追う場面は簡略し、班で話し合う部分とボランティアについて考え、一般化を図る時間を重視する流れに変更した。また、終末にはボランティアについての詩を朗読するなどして、授業の余韻が残るように工夫した。

展開Bは、Aと同じく前半は資料をもとに考えさせ、終末でG Tを活用する計画を立てた。今回お願いしたG Tは、実際に阪神・淡路大震災でボランティア活動をなさった方である。打ち合わせは事前に行ったものの、教師のねらう価値とG Tの体験談とにズレが生じることも危惧されたため、検討後、後半は教師からの絞った質問をするインタビュー形式に変更した。また、震災当時乳幼児であった生徒が資料に入りやすくするため、あえて導入部分でG Tの話を入れることにした。授業時間に余裕があれば、生徒から質問させるなど、G Tとのふれあいをもたせたいと考えた。

展開Cは、アニメのキャラクターになりきらせることで、中心発問に対する自分の意見を出しやすくしようと計画を立てた。しかし実施してみたところ、キャラクターを選ぶことに時間がかかったり、キャラクターのもつ性格や声まで意識してしまい、思うような活動ができなかったりした。手法に走りすぎてしまい、道徳的価値に迫ることができなかったのである。そのためCは全面変更し、実際の被害の様子をV T Rで見せてから資料に入ることにした。また、後半はボランティアに対する具体的なアンケート結果を示し、建前的な意見で終わらないように生徒の気持ちに揺さぶりをかけ、A・Bと違い、中心発問も大切と分かっているにもかかわらず行動に移せない人間の弱さにまで触れさせる展開とした。

イ 授業後の反省と感想

展開	学年	授業の反省と感想
A	2	主人公の気持ちの変化、話し合いにける時間が不足だった。ボランティアに対するマイナス意見が少なかったため揺さぶりが今ひとつだった。班での話し合い活動では意見に偏りが出てしまった。
	3	展開の流れが盛りだくさんだった。班活動では意見が出しづらい場面も考慮し付箋を使って意見交換をしたのがよかった。
B	2	資料は事前に読ませ時間を確保したい。主人公の気持ちの変化は省略し、G Tとの交流を主にした方が良かった。
	3	展開を流すことにとらわれ臨機応変さに欠けた。発問の主体が主人公から母親へと変わってしまったところを改善したい。
C	2	V T Rによる導入は効果があったが時間がかかりすぎた。意見がたくさん出たが、話し合いにうまく発展させられず残念だった。
	3	V T Rは効果的。素直な意見交換ができた。アンケートの結果と意見に差がなく揺さぶりの場面はなかった。ボランティアの大切さより人間の弱さの方に目がいきがちだった。
	高1	前半の資料についての話し合いよりも、後半の一般化の話し合いが積極的に行われた。自分の経験をもとに意見を述べる生徒が多かった。

ウ 学年ごとの生徒の見取り

① 抽出生徒の根拠

アンケートや普段の学校生活より下記の規準で考え生徒を各1～2名抽出した。

ア・・・自分で率先して他のために活動できる。友達に活動を呼びかけることができる。

イ・・・友達と協力して他のために活動できる。教師から言われれば活動できる。

ウ・・・活動に消極的である。教師から言われても活動がおろそかである。

② 抽出生徒の見方

発問や教師の指示に対する反応・つぶやき・活動の様子を記録する。特に、指導案A B Cそれぞれの展開の工夫による、抽出生徒の反応や様子に視点を当てて見取り、記録をする。

③ 抽出生徒の記録の実際

展開	学年	生徒	生徒の反応
A	2	ア	資料や写真に関心が高く、挙手して発表した。自分の疲れや不満より被災の気持ちが大切だと考える生徒が多かった。
		イ	はじめ「ボランティアをやってあげているのに」「文句を言われるならボランティアは続けたくない」という意見だった。一般化ではボランティアは積極的に参加したいという感想がもてた。
		ウ	資料中の発問については イ と同じ意見だった。一般化では「ボランティアをはじめるのは簡単でも続けるのは大変だ」ということに気付いた。
	3	ア	資料中の発問には「どんなことがあってもボランティアに参加」や「喜んでもらえるなら頑張る」などの意見がでた。自分のボランティア体験を振り返った感想がもてた。
		イ	資料中の発問には迷うが「困っている人が助かるなら参加する」の考えが多かった。後半は変容があった。
		ウ	はじめ「文句を言われたら言い返す」という考えだった。後半はボランティアへの賛成意見と「自分たちでやればいい」という意見の両方が出た。
B	2	ア	写真やG Tに関心が高い。積極的に挙手して発表していた。ボランティアに対し好意見だった。
		イ	結果に関心を寄せ、周囲と意見交換をしていた。後半も発表はなかったが、友達の意見に対し自分の考えをつぶやいていた。ワークシートも配布されるとすぐに自分の感想をまとめていた。
		ウ	授業はじめは落ち着きがなかったが、最後には「おれがまじめな事書いていいのかな」といいながらボランティアの大切さについてまとめていた。
	3	ア	G Tの話を真剣にうなずきながら聞く。「ボランティアは自分の成長のため、誰かのために行動するのは当然」という考えがもてた。
		イ	G Tの話を真剣に聞く。積極的に挙手して発表した。感想を書くのは時間がかかっていた。ボランティアに対する考えが変わったという感想が多かった。
		ウ	G Tの話を真剣に聞く。資料に入ると落ち着きがなくなる。ボランティアについては「余裕のある人がやるものではないと気づいた」という感想だった。
C	2	ア	V T Rに真剣に見入る。ボランティアについては「誰かがやるからいいと思ってしまうがこれからは取り組みたい」という意見だった。
		イ	V T Rに真剣に見入る。「行動に移すのは面倒くさいかも」「これからはやってみたい」という意見がでた。
		ウ	アンケート結果に反応を示した。ボランティアについては「面倒くさい」という感想だった。後半は「少しだけやってもいいと思った」という変容があった。
	3	ア	V T Rに真剣に強い関心を寄せていた。ボランティアに対して「大変でも取り組んでいきたい」という意見が多かった。
		イ	V T Rに真剣に見入る。行動に移すのは難しくても「人助けは大切」という意見だった。
		ウ	資料への関心は低かったがV T Rへの関心は高かった。

エ 実践後の考察

① 3種類の展開について

同一資料に対し、3種類の展開を授業実践したことは大変有意義であった。それは学年や校種を超えたメンバーで議論・検討を重ねることができたことが大きい。また、指導案を立てた後も他クラスで実施してもらい、忌憚のない意見交換をすることで、授業改善に大いに役立てることができた。検討後の展開にも変更の余地・課題はたくさん残されているが、一つの資料をここまで大人数で検討することは良い研修の機会となった。

展開の手法としては、やはりV T Rなどの視聴覚教材やG Tとのふれあいが効果的であった。**ウ**の生徒も資料の時に比べ強い関心を示している。またA～Cを通して、生徒の活動が盛りだくさんで、価値に迫る話し合い活動や気持ちの揺さぶり、深化がおろそかになってしまった反省点がある。今後は発問の精選と一般化の時間を確保していきたい。

② 異校種・学年の違いについて

今回は本校で同一資料を中学2・3年にまたがって実施した。年齢差が一つであることや学年の雰囲気などを考え、学年による発達段階の差はそうないものと当初予想していた。しかし、実際はワークシートや発表された意見、G Tの感想などから3年生の意見の方が2年生に比べ幾分しっかきしていることが分かった。これは3年生が2年生の夏休みに全員ボランティア活動をしたり、職場体験学習を経験しているところも多少の影響があるものと考えられる。人や物とのかかわりを重視した体験活動が道徳性の発達に大切であることが実感できた。また、佐和高校の協力で1年生5クラスに同じ展開で授業を行った。相互に授業参観をしたり、アンケートや事後の感想など、連携して情報交換したことは、互いの研修に大いに役立ったと考える。

③ 抽出生徒について

各**ア～ウ**の抽出生徒については主に**イ**の生徒の感想がよくまとめられていた。ボランティアに対し、積極的に参加したい意志が多く書かれていた。**ウ**の生徒についても個人差はあるが授業前の実態調査よりボランティアに対する考えが「ボランティアは責任感も必要」、「自分のことを知らない人とを助けられない」など深まった生徒がいた。今回、発表できなくてもワークシートには感想が書けている生徒が増えた。

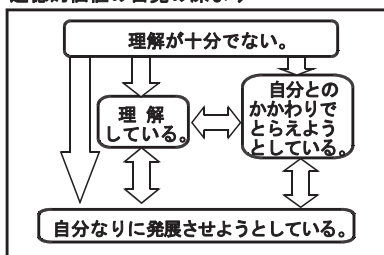
(3) 生徒一人一人に応じた支援の工夫

人間は、内面的な葛藤や感動などを体験し、道徳的価値の自覚を深めていくことによって道徳性が発達する。道徳的価値とは人間としての在り方や生き方、人間らしさを表すものである。そして道徳的価値の自覚とは、日常生活の様々ななかから自分の内面を見つめ整理し、自己の生き方の指針となるものである。道徳的価値の自覚を深めるには、「道徳的価値についての理解」「自分とのかかわりで道徳的価値をとらえること」「道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われること」の三つの事柄が必要である。そこで、この三つの事柄から、「理解が十分でない。」「理解している。」「自分とのかかわりでとらえようとしている。」「自分なりに発展させようとしている。」の四つの側面から道徳的価値の自覚の深まりをとらえることにした。また、図1で示すように、道徳的価値の自覚は側面同士がフィードバックしながら深まっていくものとしてとらえた。

ア 類型について

道徳的価値の自覚を深めるには、生徒の姿を様々な角度から把握し、道徳の時間を中心に全教育活動で適切な支援をする必要がある。そのために、道徳的価値の自覚の四つの側面における生徒の姿から、類型のポイントを下の表のようにとらえた。類型別に支援を行うことで、生徒の道徳的価値の自覚がさらに深められると考える。

道徳的価値の自覚の深まり



道徳的価値の自覚における四つの側面と生徒の姿から見る類型のポイント

類型	道徳的価値の自覚について	道徳的価値における生徒の姿
1	理解が十分でない。	道徳的価値に基づいた考え方や行動があまり見られない。
2	理解している。	道徳的価値に基づいた考え方や行動をしている。
3	自分とのかかわりでとらえようとしている。	道徳的価値の大切さから、自分なりの考え方や行動をしている。
4	自分なりに発展させようとしている。	道徳的価値の大切さから、自分の生き方に夢や希望を抱いている。

イ 具体的な支援例

下表は道徳教育における類型別支援例である。道徳的価値の自覚の深まりを「学校生活における見取りの視点」からとらえ、支援内容を道徳の時間とその他の教育活動から考えた。全教育活動を通して類型別支援をすることで生徒の道徳的価値の自覚を深めたい。

類型	道徳的価値について	学校生活における見取りの視点	道徳の時間における具体的な支援例 (支援を行いたい中心の場面、方法、発問及びその他の支援)	各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における支援例
1	理解が十分でない。	- 問題意識がもてない。 - いろいろな価値への気付きの視点が見つかからない。 - 興味・関心が薄い。 - 意欲が低下している。 - 表現することが苦手である。	導入・展開(前段) で、興味や関心を高めたり、意欲を喚起させる。(道徳的価値への動機付け) 方法 ・生活体験から想起させる。 ・アンケート結果や視聴覚資料から印象付ける。 ・実験や観察など実物に触れる体験を取り入れる。 ・資料の主人公や筆者に共感させる。 ・道徳的価値や学習に興味・関心をもてるような、より具体的な状況を考えさせる発問をする。「～をやってみて、どうだったかな?」「～を見てどう思ったかな?」「～さんはどんな気持ちになったかな?」 発問 ・どんなところを考えるのか意識できるように声かけをする。 ・思っていることを安心して表現できる場を設定する。 ・「よく気が付いたね」「～も同じだったかもしれないね」 その他	・各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における支援例 ・学習過程での気付きや頑張りを認め、学ぶ楽しさや成長する自分を実感させながら、興味関心を高める。 ・体験活動における様々な気付きや思いをあたためる場を積極的に設定する。
2	理解している。	- 問題意識がもてるが、自分のこととして考えられない。 - いろいろな価値への気付きの視点が単一的である。	展開(前段) の葛藤場面で、道徳的価値を自分のこととしてとらえさせる。(心情の共感と葛藤) 方法 ・資料の主人公や筆者に共感させ、葛藤させる。 ・自分の体験を想起させるなど、自分だったらどうかを考えさせる。 ・価値観の広がりや深まりをもたらすような、視点を転換させる発問をする。 ・「自分だったらどうだろう?」「～さんの立場だったらどうするかな?」「理由や根拠を明確にすることで、自分の問題としてとらえさせる。 「どんなところからそう思ったのかな?」 ・友達や先生の考えを聞き、新たに感じたことや考えたことをもとに、自分を振り返らせる。 その他	・自分の考えを明確にして課題や話し合い活動に臨めるようにする。 ・体験活動における様々な気付きや思いを交流させる場を設定する。
3	自分とのかかわりでとらえようとしている。	- 問題を自分のこととして考えられる。 - いろいろな価値への気付きの視点が多角的である。 - 自分の生き方に目標がもてない。	展開(後段) で、道徳的価値から自分の生き方を考えさせる。(道徳的価値の追求) 方法 ・資料の主人公や筆者の姿から、道徳的価値の意義を見いださせる。 ・道徳的価値からこれまでの自分を振り返らせ今後の生き方を考えさせる。 ・よりよく生きたいという、自分自身の願いに目を向けさせるような発問をする。「～できたのはどうしてだろう?」「～のためにはどうすることがいいのだろう?」 ・それまでの道徳的価値に対する意識と行為の差に着目させることで自分の生き方に問題意識をもたせる。「今までの自分はどうかだったかな?」 ・よりよく生きようとする心が、自分の中にもあることに気付かせる。 ・行為よりも心の問題として考えさせる。 「もし、～だったとしてもできるかな?」 その他	・課題解決へのよりよい見方や考え方を積極的に認め、具体的な目標に向けて自信をもって取り組めるようにする。 ・体験活動における様々な気付きや思いから、自分の新たな夢や課題がもてるような場を設定する。
4	自分なりに発展させようとしている。	- 問題意識から自分の生き方への課題へと発展させている。 - いろいろな価値への気付きの視点が客観的である。	展開(後段)・終末 で、自分の生き方をより具体的に考えさせる。(よりよく生きようとする実践意欲) 方法 ・これまでの自分を振り返らせ、よりよい生き方への意欲をもたせる。 ・他の人や社会とのかかわりで考えさせる。 ・よりよく生きようとする意欲や心構えを考えさせる発問をする。 「これから～について考えてみよう。」 発問 ・生き方の視点からこれまでの生活を振り返らせ、自分の意識の変容から心の成長をとらえさせる。「よく気が付いたね。」 その他	・学習から自分の生き方の問題へと深まりが見られるようにする。 ・体験活動における様々な気付きや思いから自分の新たな夢や課題がもてるような場や実践の場を設定する。

(4) 生徒が相互に学び合える授業形態の工夫

自己と向き合い、道徳的価値の自覚をより深めるには、多くの人や社会、自然とのかかわりを通して多様な考え方に触れる必要がある。生徒一人一人に応じた支援の工夫として、補助発問や切り返しの発問等を工夫してきたが、さらにそれらが効果を上げられるように、教師だけでなく、生徒相互やG・T、保護者とかかわれる授業形態の工夫を考えてみた。

ア バズ学習

基本発問で自分の考えをしっかりと持たせた後に、バズ学習を取り入れた。はじめは切り返しの発問をしていくことによって、道徳的価値を自分のものとしてとらえ、自己とのかかわりで考えられるようにする。その後、バズ学習を取り入れることにより、多様な価値と出会いながらグループで考えを深めていく。実践では生徒が相互に話し合う時間をしっかり設定したため、ねらいとする道徳的価値を高めることができたと考える。また、バズ学習での意見を学級で共有することで、事前調査で道徳的価値の理解が十分でなかったグループにも、ねらいとする道徳的価値に気付かせることができた。

イ 道徳集会

【資料④－１】は、第３学年における道徳の時間と他の教育活動との関連を示している。学期毎に定めた重点項目との関連を意識しながら様々な場面で指導してきた。また、【資料④－２】はその一環として行った道徳集会の準備資料である。

授業参観の日に集会に行くことで、保護者が話合いに参加できるようにした。また、卒業生にも声をかけ、生徒が高校生や保護者の多様な価値と出会えるように場を設定した。導入に生徒、保護者、高校生でパネルディスカッションを行い、これから話し合う内容について問題提起した。次に各グループ毎に話合いをし、全体で意見を発表させることでグループ以外の考えにふれる時間とした。終末では振り返りとして意見を付箋にまとめさせ、後日教室掲示した。生徒の付箋に書かれていた感想の多くは、「色々な考えを聞けてよかった」「大人と話せてよかった」とあり、話し合うことで多様な価値とふれ合う機会とすることができたと考える。また、保護者の感想としては、「中学生の考えに感心した」や「夢をもって頑張ってもらいたい」など、生徒への温かい励ましの言葉が多かった。

3 おわりに

道徳の時間の後で、どうしてもっと生徒の本音が引き出せるのだろうか、どうしてもっと道徳的価値の自覚を深められるのだろうかと考えることがある。検討を重ねた指導案や、生徒が積極的に発表した授業でも、実践後はこれでよかったのかと迷ってしまうことが多い。しかし、以前に参加させていただいた研修会で、「道徳の時間は一週間に一つだけ贈れる生徒へのプレゼント」という言葉を聞き、まず大切なのは、どんな授業でも必ず実践することだと考えるようになった。学校行事等で、道徳の時間ができなかった週は朝の会や帰りの会を使ってミニ道徳をする、生徒の言葉を受け止めながら、話合いが続くように次の発問を考える、こんな繰り返しが今の授業のもとになっていると思う。これからも、生徒に寄り添い、共に考えながら一時間一時間を大切にしながら、道徳の時間に向き合っていきたいと考える。

【資料①】

ミサちゃんへ

ミサちゃん ごめん。
わたし、今度のボランティア行きたくない。
せっかくミサちゃんが誘ってくれたけど、もういいかな一つて感じ。
そもそも、部活や勉強だってあるし、ウチらが行かなくなつたって、
誰かが行ってくれるよね？
はじめ、ミサちゃんがボランティアに誘ってくれたとき、
正直、面倒くさいって思った。老人とか怖いし。
あのとき、テストも近かったし、部活の大会だってあったじゃん。
でも、ミサちゃんに何度も誘われて、「やだな」って思いながらも
参加して、ホントはよかったよ。
だって、みんなすごい喜んでくれたじゃん。
泣いてたおばあちゃんとかいたよね。
地区の公民館で育てた鉢植えを届けただけなのに、
お年寄り、みんな感激してくれてさ。
お菓子くれたおじいちゃんもいたよね。楽しかった。
だってさあ、なんかみんなウチらのこと、必要としてるって感じが
したじゃん。ウチら、いいことしてる？みたいな。

でも、もういいや。
だって、この間の日曜日のむかつかない？
せっかくお花届けてあげたのに、「白い花じゃなくて、赤い花がいい。
取りかえてきて」とかいうおばあさんいたよね？タダの花に文句言
うなんてひどいよね。
忙しいのにウチらがせっかく行ってやってんのにさ！
あと、なに、おのおじいさん。いきなり「うちには来んな！」
って ひどくない？ せっかく行ってあげようってのにさ。

だから、もういいよ。
ミサちゃんには悪いけど。
今度の日曜日は、ミサちゃん一人で行って。

でも、何でミサちゃん、
あんなおじいさんとおばあさんにおこんなかったの？
へんだよ、ミサちゃん。

でも、まあ、いいや。
とりあえず ごめん、ミサちゃん。

まみより

【資料②】

私のもやもや

氏名



怜ちゃん

中学校に入学して、
1ヶ月が過ぎました。
新しいクラスにも慣れたけど、
なんか「ムカッ」とする人がいます。
怜ちゃんです。悪い人じゃないんだろ
けど、なんかイヤ。

だって、男子とばかり大きな声で話をしたり、
この間のグループでの話合いも、勝手に仕切ってたし。
空気読めてないっていうか。
それにね、玲ちゃんと同じ小学校の人からの話
では、先生にもひいきされてたんだって。
なんかイヤ。
だから、今度の席替えて同じグループに
なっても、わたし話なんかしないんだ。
仲良くはしないと思う。

さやか

怜ちゃんの言い分



あなた

わたし、あなた、そしてみんな
幸い本棚が倒れた程度の被害だったわが家は、関東大震災に遭った祖母の教訓もあり、飲料水や米の買い置き、ポリタンクや缶詰が、いつでも取り出せるところにあったので、食糧には何も苦労しなかった。さらに、父の大阪の会社から、車で救援物資をいただき、ガスボンベやレトルト食品も手に入り、わずかながら、生活にゆとりがもてた。だからわたしは、この震災で食糧や水などの面で困っている人助けに何らかの役に立ちたいなあと思いついて、近くの住吉中学校へ出かけた。
ここにいる人々は、家屋の全壊、半壊、ガス漏れによる避難勧告などといったさまざまな理由で、避難されていた。ストローもじゅうたんもない寒い教室にひしめき合っている。こんな悲惨な状態の中、最初は、残念なことにならなかった。そばにいたおばあさんに、「テレビで見る避難所は、食糧が届いているんだよ。うちのところにも分けてほしいね。もう三日も何も食べていないんだよ」と話しかけられて、そうなんですか、としか応答できなかった。道路もき裂が入り、車の渋滞、早く来て、早く来てとトラックを待つことしかできない自分の無力さに腹がたつた。わたしは学校へ行こうと決心するまでに、心のかけがれが一つある。理由は二つある。一つは、しゅろ恥心。自分からやりません、なんて頼まれたらやるけど、二つ目は、マスコミの報道だ。テレビやラジオでは「医療や建築の資格をもつ方」と呼びかけがある。手伝に行こうかなと思った矢先だった。憶病で神経質なおじいさんは、「資格がないと手伝えないのかもしれない、じゃまな存在だったら、行かないほうがいいかもしれない」と、一人で思い込んでいた。
母の意見も聞き、気持ちの整理がついたところで、なにげなく辞書を引いた。ボランティアって何だろう。辞書によると、「公共の福祉事業活動に、自主的に無料奉仕で参加する人。」と記されていた。自主的にということばを見た瞬間、わたしは、決意した。行って自分でできることを探してこよう。
夕方になって、母と弟と三人で、夕飯のしつこくに行った。食卓の用意は、人手が不足しているからだ。中学校の先生たちが働いている様子を目に映った。被災者は、食糧を取りに来るだけだ。どうして、いっしょに働かないのか不思議だったが、答えてくれそうな人はいなかった。
わたしに与えられた仕事は、おにぎりを二千個作ることだった。次から次へと炊き出しが来るので、ベースを落として握ることも、途中で休みながら握ることも許されない。腰が痛くなった。顔がくたくたって、おにぎり

道徳資料



一日でやめてしまいたくなるような夕食作りだ。五時から始めて、九時ようやくできあがった。思いもよらぬ仕事で、ぼう然としていたわたしは、被災者の方から、「おいしいわ。」「ありがとう。」「ごちそうさま。」と声をかけられて、体は疲れていても、すがすがしい気持ちになる。当たり前のことばがこんなにうれしいとは思いませんでした。避難生活から一週間目、わたしがいつものようにおにぎりを作っているとき、「あの人は大きくて、わたしはこんなに小さいん換えてよ。」「おにぎり、飽きたから違うのにして……。」こんなこと言われるなんて、だれが想像するだろう。悔しかった。地震から七日目、とうとう今までのストレスと悲しみと怒りが、わたしから冷静さを奪った。やけになったわたしは、母に当たった。言いたいことを一つ残らず言った。
「どうして被災者は手伝おうとしないんだ。くれぐれ言うだけじゃないか。わざわざ手伝いに行く必要ないじゃん。自分でやったらいいんだ。やんないから、好き勝手なことが言えるんだ。もう行く気はない。殿様ぶる人の顔なんか見たくないわ。」
母は、泣きながら話したわたしのことを、同情はしてくれなかった。わたしの言ったことは、間違っていたのか。静かに母は、
「学校に避難して来ている人たちは、家族を失ったり、家が全壊や半壊して、つらい思いをしているの。おまけに食糧も十分もらえない。精神的にも体力的にも限界にきているの。生きていく不安を抱えて生活している人にとって、こういふときだからこそ、いっしょにがんばりましょう、手をささげるべからず、ボランティアの仕事でしよう。食事を作ることも、ボランティアじゃないのよ。」
と言った。わたしのこんな何もわかってくれない母に絶望し、ふてくされて自分の部屋にこもった。
(平間祥子「生徒作文」)

【資料③】「わたしあなた、そしてみんな」指導案展開部

○ねらい 社会への奉仕の気持ちを深め、それを実現しようとする態度を育てる。

指導案A

主な活動・発問と予想される生徒の反応	・教師の支援・評価口
1 アンケート結果からボランティア活動についてクラスの実態を知る。 2 阪神大震災とその後のボランティア活動について、写真を通して知る。 3 資料「わたし、あなた、そしてみんな」を読みボランティアについて考える。 ○ 場面状況と「わたし」の心情を捉える。 ア「おいしいわ」と言われたときの「わたし」の気持ち イ「のりないの？」と言われたときの「わたし」の気持ち ○ 「食事を作ることだけがボランティアじゃないのよ」と母に言われて部屋にこもった「わたし」はこの後どうすると思いますか。またそれはなぜですか。 ・ボランティアを続ける ・もう行かない ・ボランティアは大切だから ・誰かの役に立った方がいいから ・もう十分頑張ったから ◎ もしあなたがただったらどうしますか。それはなぜですか。 ・ボランティアを続ける ・もう行かない ・わかっているけど無理かも、できない ・今までは無理だったけど、この状況なら ・ボランティアって何だろう 3 この授業を通して、ボランティアについて考えたことをまとめる。	・ ボランティアの大切さはわかっているけど実際はあまり参加できないクラスの実態にふれ、この後の話し合い活動が表面上で終わらないようにしたい。 ・ 最近の震災の話も交えながら、被害状況やボランティア活動について関連な意見を出させたい。ここでは、自分の感じたことや考えたことがのびのびと言える雰囲気づくりに努める。 ・ 資料は母親から意見され、「わたし」がふてくされて自室にこもるところで切る。 ・ 話題の内容と場面状況を場面絵やセリフの書かれた短冊を時間経過の軸にし、主人公の感情を曲線で示す。 ・ 生徒の言葉が出やすいように板書はせずに教師の会話でつないでいく。 ・ 今後、ボランティアに参加するかどうか意思表示カードで自分の考えを示させる。 ・ 座席を班形態にさせ、班で意見を出し合わせる。 ・ 生徒が意見を出しやすいように、ボランティアに対して批判的な「わたし」の発言も受容し、共感的な発言をして発表を促したい。 ・ 正誤を決めるのではなく、意見を出し合うことが目的であることを押さえておきたい。また、参加の是非だけでなくその理由も出させることで、深く本音で話し合えるようにしたい。 ・ 各班で出た意見の発表を通して互いの考えを知り、自分の考えを整理させたい。 ・ 自分だったらボランティアを続けるかどうか意思表示カードで自分の考えを示させる。 ・ もう一度アンケートの結果を示し、気持ちに揺さぶりをかけたい。 ・ ワークシートに感想をまとめさせる。
評 社会への奉仕の気持ちを深め、それを実現しようとする意欲が高まったか。 (発表、観察、ワークシート)	

指導案B

主な活動・発問と予想される生徒の反応	・教師の支援・評価口
1 阪神大震災とその後のボランティア活動について、写真とGTの体験談を通して知る。 2 資料「わたし、あなた、そしてみんな」を読みボランティアについて考える。 ○ 場面状況と主人公の心情を捉える。 ア「おいしいわ」と言われたときの「わたし」の気持ち イ「のりないの？」と言われたとき「わたし」の気持ち ウ「もう行く気はない」と言った「わたし」に母親は何と言ったか。 ・もう行かなくていいよ、よくやったね ・もう少し続けてみたら、頑張ろうよ ・自分で決めなさい 3 実際にボランティア活動しているGTへのインタビューやアンケート結果から考える。 ○ アンケート結果を知る。 ○ インタビュー内容 ・なぜ遠方からわざわざボランティアに行ったのか ・どんな気持ちで活動していたのか ・資料の中の「わたし」をどう思うか ◎ ボランティアって何だろう。 ・大切なもの ・自分の犠牲に成り立つもの、自己満足 ・立派だけど自分には厳しいかも ・自分にはまねできない、してみたい 4 GTの話から気づいたことや感じたことをワークシートにまとめる。	・ 最近の震災の話も交えながら、生徒のよく知らない阪神・淡路大地震についての被害状況を簡単に説明した後、GTの紹介も兼ねながら当時の惨状について話していただき資料への理解を深めたい。 ・ 資料は「わたし」がボランティアの不满を母親に当たるところで切る。 ・ 場面状況と主人公の心情を短冊を黒板に表示することで簡単に確認していく。 ・ 生徒の言葉が出やすいように板書はせずに教師の会話でつないでいく。次の発問の前に生徒の発言のたまかをまとめて短冊脇に書いておく。 ・ 生徒が意見を出しやすいように、ボランティアに対して批判的な「わたし」の発言も受容し、共感的な発言をして発表を促したい。 ・ 母親の絵と吹き出しを掲示してイメージをもたせる。のびのびと意見が出せるように批判的な考えも受容していく。また、教師の言葉かけも批判的な要素を含ませながら、表面的に陥りやすい生徒の考えに揺さぶりをかけたい。 ・ 建前になりがちな意見を、事前に取ったアンケート結果をもとに振り返らせたい。 ・ ボランティアを実践する時の意欲と勇気、実際にはなかなか行動に移せない現実の自分やボランティアの意義についてGTへのインタビューから感じ取らせていきたい。 ・ 自発的に行動する無償の行為の素晴らしさと、なかなか行動できない人間の弱さ、それでも前向きに頑張る意欲を押さえて考えさせたい。
評 社会への奉仕の気持ちを深め、それを実現しようとする意欲が高まったか。 (発表、観察、ワークシート)	

指導案C

主な活動・発問と予想される生徒の反応	・教師の支援・評価□
1 阪神大震災とその後のボランティア活動について、新聞記事や写真を通して知る。 2 資料「わたし、あなた、そしてみんな」を読み、ボランティアについて考える。 ○「食事を作ることだけがボランティアじゃないのよ」と母に言われたのがあなただったらこの後どうしますか。またそれはどうしてですか。 ・もう十分頑張ったから行かない ・もう少し続けてみる ・被災者の人が気の毒だから行く ・どんなことを言われてもボランティアは大切だから続ける ○ アンケート結果から現実としてもう一度考えてみよう。 ・実際にできるよ ・大事なことはわかるけど難しい ・自分には無理かもしれない ◎ ボランティアが大切だとわかっているのに、なかなか行動に移せないのは可でだろう。 ・一人で考えて行動しなけければならないから ・他人中心に考えなければいけないから ・自分にも都合があるから 3 この授業を通して、ボランティアについて考えたことをまとめる。	・ 最近の震災の話も交えながら、被害状況やボランティア活動について関連な意見を出させたい。ここでは、自分の感じたことや考えたことがのびのびと言える雰囲気づくりに努める。 ・ 資料は母親が「わたし」を諷めるところで切る。 ・ 話題の内容と場面状況を場面絵やセリフの書かれた短冊を黒板に表示することで確認していく。 ・ 生徒の言葉が出やすいように板書ませずに教師の会話でつないでいきたい。 ・ 生徒が意見を出しやすいように、ボランティアに対して批判的な「わたし」の発言も受容し、共感的な発言をして発表を促したい。 ・ 資料の中のことでではなく、自分のこととして捉えられるようにアンケートの結果を示したい。 ・ ボランティアに対し建前的な表面上の意見を、実際のアンケート結果を提示することで揺さぶりたい。 ・ 本音の考えが、ボランティアを否定することではなく、ボランティアの大切さは前提に実践の難しさとそれでも取り組む素直らしさに気づけるような話合いの流れをたえず押さえていきたい。
	評 社会への奉仕の気持ちを深め、それを実現しようとする意欲が高まったか (発表、観察、ワークシート)

【資料④－１】第 3 学年 道徳的実践力を高めるための取り組み

今までの取り組み	成果と課題・生徒の変容
H19年度 7・8月 夏休み全員ボランティア ・ 公園の除草や校舎内のペンキ塗り、地域のゴミ拾いなどのボランティアを実施 【勤労・奉仕、自主・自律】 11月 職場体験学習（総合） ・ 各事業書での体験学習、レポートによる学習のまとめ 【勤労・奉仕、理想の実現】 12・3月 学年ボランティア隊 ・ 有志による活動(64人参加) ・ 学習対策班、修学旅行計画班、美化活動班に別れて活動 【勤労・奉仕、自主・自律、集団生活の向上、愛校心】 3月 佐和高校見学(高校調べ・総合) ・ 2クラスずつ訪問し授業見学、高校の先生にインタビュー ・ 各自、感想をカードにまとめた後、学年集会で発表 H20年度 4・5月 修学旅行に向けて 7・8月 高校体験学習 9月～ 有志ボランティア 募集 ・ 朝の階段清掃、選挙管理委員会	・ 他力本願なところがあり、活動内容や日程など自主的に決められない生徒が多かったが、ほぼ全員が何らかのボランティアを行った。 ・ 活動の様子は良好。雨天でできなかった生徒は別のグループに加わって手伝ったり、公園のゴミの多さに利用のマナーを考えたり、生徒なりによく頑張っていた。 ・ 夏休みのボランティアを生かして、良い体験を積み重ねることができた生徒もいたが、働くことの意義への理解や礼儀に欠け、体験学習の成果を上げられない生徒も多数いた。 ・ 事前の指導はしたつもりだが、体験の事前というより日々の指導の甘さを反省した。 ・ 「学年をよくしよう」の言葉かけをして参加を促した。意欲的に活動した。 ・ 活動する生徒→教師の賞賛→他生徒の意欲喚起→教師との関係構築、参加した生徒に達成感・所属感をもたせる、がねらいだった。 ・ 春休みに全員で美化活動をした。使用していなかったトイレの清潔に際し、「いい3年になるためにはお応えなんだよ」の言葉が参加者から出る。普段見られない生徒の姿が見られた。 ・ 学年ボランティア隊を中心に見学のマナーなど指導を入れた。 ・ 高校生活に必要なこと、また学習とあわせて高校生になるために必要なことが何か気づく生徒もいた。(感想カードより)
内 容	道徳との関連
2学期のテーマ 「自主・自律」 ○各教科・領域での取り組み(予定) 国……自分に足りない内容を選択補充。 「話し合いで問題を解決しよう」 社……「人権について考える」 数……粘り強く問題を解く。 友達と意見や考えを交換し解答を練り上げる。 理……グループで協力して実験に取り組む。 英……「携帯電話」携帯電話の使用法について考える。 音……「合唱」パート練に励む。 美……「銅製レリーフ」道具・技法選択 保体……「長距離走」全員参加を目指す。 技家……「1日家事体験」 総合……「自分史づくり」 特活……「受験の心構え」、委員会活動 体育祭、音楽会、道徳……道徳集会 その他……学年キャンペーン(学年だより・学級委員会他) 有志ボランティア(恒時) ○道徳集会(12月予定) ・ 保護者、卒業生(佐和高1年有志を中心に)を交えて一マを絞って話し合う。 ・ テーマやグループ構成、展開方法などはまだ未定。 ・ 有志ボランティアの登用により「自主・自律」の態度育てたい。 3学期のテーマ 「自主・自律」「勤労・奉仕」「愛校心」 ○有志ボランティアの活用 ・ 些細なことでも自分たちの問題と捉えさせ、自主的・意欲的に活動させてみたい。また、自分たちもやればできるという自信をつけさせ、正しい心構えや生活が自分にとっても充実した楽しいことであることを感じさせて卒業させたい。	・ 学年・教科内で情報交換して関連つけた道徳の時間を展開したい。資料なども協力して工夫していきたい。 例) 美術で育てたい力 自己態度の決定 ↔ 表現・進捗に合わせた技法・道具の選択 完成までの見通しを立てる 「自主・自律」 深めたい道徳的価値の自覚 有志ボランティア ↔ 道徳集会 体験活動で実践化 1ー(4)理想の実現・3ー(3)生きる喜び・4ー(1)集団生活の向上 ・ 昨年度の反省から生徒の良い活動は全員に伝え、生徒一人一人を育む視点で大切にしたい。事前の指導は綿密に、同一歩調で行いたい ・ ねらいにあった「道徳の時間」題材を事前に(計画的に)用意しておきたい。 2ー(1)礼儀・4ー(6)家族愛・4ー(8)郷土愛・4ー(5)勤労・奉仕 4ー(7)愛校心 課題 もっと効果的な方法はないか、これでいいのか 道徳集会のもち方での注意点は 体験学習 ← 道徳の時間…の一般化する時の支援方法は 授業の流し方は 教師が押さえておくことは 生徒への効果的な返し方は

【資料④－２】第３学年道徳集会全体の流れ

- ◆テーマ「将来のために何？」
◆価値「理想の実現」・「自主・自律」

時間	生徒の活動	形態	教師の動き・留意点
13:10	○ボランティア生徒集合（体育館）	生徒＝学年集会 保護者 評議員 高校生	・ 保護者受付開始 ・ 会場セッティング，パネラーの確認。
13:15	○最終確認		
13:20	○一般生徒整列完了		
13:30	○はじめの言葉（ ） ○流れ確認（ ） ○パネルディスカッション パネラー 生徒 4名 保護者 2名ずつ 高校生 〃 コーディネーター（ ）	各グループごと 円になる	・ 本時の活動目標や流れを説明し確認する。 ・ コーディネーターの司会で，ディスカッションを進めていく。結論を急がず，問題提起の形でディスカッションを締めくくる。 ・ 高校生や保護者の立場で考えた意見の特徴を大まかにとらえ，キーワードとしてホワイトボードに貼っておく。
13:40	○移動開始		
13:45	○グループごとの話し合い ・ 司会の生徒が指して発表してもらう。 ・ 記録の生徒は，発表内容を記録する。 ・ 感想をまとめる。 付箋に書いて画用紙に貼る。		
14:05	・ 移動開始	生徒＝学年集会 保護者 評議員 高校生	・ 保護者や高校生にも積極的に意見を求めるよう指示しておく。 ・ 教師もグループに入って話し合う。 ※ 事前に書かせているワークシートを読ませ、自分の考えをしっかりとさせた後、そこから話を発展させるようにする。
14:10	・ 発表 ボランティア生徒による発表		
14:16	・ 学年主任の話		
14:19	・ 終わりの言葉（ ） ・ 佐和高生、評議員退場 ・ 生徒退場		・ 3グループ ぐらいの予定。 ・ コーディネーターの司会により，様々な視点をもつ意見が出せるように発表グループを決めていく。 ・ 意見の特徴を簡単にまとめ，短い時間で価値が共有できるように配慮する。 ・ 拍手で退場 ・ 画用紙・ワークシート回収（ボランティア生徒）
事後	・ 付箋をまとめた画用紙は各クラスに掲示する。 ・ 話し合いをした感想など，短学活でふれる，家庭でも話し合いができるようにする。 ・ ボランティア生徒へは，活動の様子を集会等でほめ，頑張りを賞賛する。		